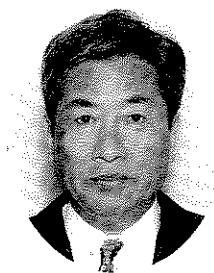


第4章 将来への展望

将 来 へ の 展 望



鹿児島工業技術センター
所 長 廣 末 英 晴

5年、10年、20年という節目ごとに過去を総括し将来を展望することは、時代とともに当工業技術センターが発展するために大切なことであると考えます。

さて、センター設立後この10年間にそれ以前と何が大きく変わったのであろうか？

まず回りをみるとグローバリゼーションが確実にしかもかなりのスピードで進行し、絶えず世界の中の日本、世界の中の鹿児島そして自分を見つめなければならなくなってきたことがあげられよう。例えば、人口爆発、生活水準の向上とともに進行しつつある地球規模の環境問題、世界中で進行する情報革命、産業の生産基地の世界規模での移動（現在はアジア）など地球規模、世界が必ず最初につく変革、変化であろう。

国内においては、上記の流れを受けて、産業の空洞化が進みわが国からかなりの産業が海外に拠点を移しつつあるとともにこれに対応するために産業構造の変革、すなわち高度化、先端化を図りつつ、新産業の創造を国策として遂行しつつあります。このため国も公設試の研究開発機能の強化に力を入れており、これを通して地域の産業の高度化、活性化を図ることを一つの手段としています。これを受けて公設試も研究開発機能の強化に努めているところです。しかしながら、公設試にとっては従来からの依頼分析・試験、技術相談・指導、情報提供、人材育成などの多岐にわたる技術支援事業が依然として重要な業務となっており、限られた時間、人間で研究開発機能を更に強化するには支援事業の効率化を図りつつ、研究開発も効率化、高度化する必要があります。研究開発を行う際の基本的に重要な事柄として、まず①人材の育成とともに、②研究テーマの設定・評価があげられます。今後は、研究開発推進会議の各委員を始め、いろいろなレポートでも指摘されているように世界に通じる研究者を育成していくことは当然のこととして目指す必要がある一方、研究テーマは地元が期待するところから掘り起こし、これを解決し、そして発表するレベルは世界に通じるものであることが必要であろうし、成果は地元の中小企業へ移転し活用してもらうことがより重要です。このためには、工業技術センターが主体をもちつつも外部の有識者の方々から研究テーマの設定に当たって意見、提言をもらう場の設定、さらには得られた成果を評価し、移転する工夫が必要となろう。この困難な二つの事柄の着実な実行を通して、当工業技術センターがこれから更に進展する技術革新の中においても県内中小企業の技術的拠りどころとなる責務を果たしていけると考えます。

WOOD SPECIALIST



木材工業部

研究員 図師 朋弘

早いもので私が鹿児島県工業技術センターでの研究業務に就いてから3年が経過しました。大学での専攻が林学でしたので木材工業部に席を置き、木竹材の強度関連の研究、NC加工技術の研究を行っています。大学では携わることのなかったテーマでしたので戸惑うことも多い日々でした。

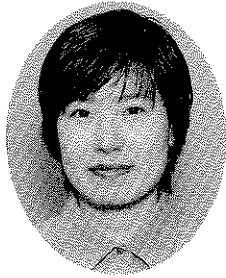
幸運なことに2年目からは「中小断面集成材の製造システム開発」という大型研究に参加することもでき、いろいろな勉強の場を与えられました。また、多くの人たちの協力を得ながら“丸太の等級区分装置”も試作することが出来、研究成果が形になる喜びを味わうことも出来ました。

ここで、今までのセンターでの“自分”を振り返ってみますと、確かにいろいろな経験を積んできましたが、はたして研究者として成長してきたのか少しばかり疑問に思います。センターに入ってから、ただ目の前にあることだけを無難にこなしていました。何か困難なことに遭遇するとすぐ先輩方に頼り、時には大きな迷惑をかけていたのではないかと思います。楽な選択肢ばかりを選んで自分が今までであったように思います。先程述べました事業においてもそのような感じで、あっという間に3年間に過ぎ去ってしまいました。また、業界の方たちと接する機会が多いのですが、時には質問に答えられなくて知識のない自分にもどかしさを感じることもありました。きっと、私に頼りなさを感じた方々もいるのではないかと思います。もっと勉強しなければ・・・と、思いつつ現在に至っています。この3年間は研究者として消極的だった気がします。

これからの自分はどうなっていくのであろう？ここで、私の目指す将来像を描いてみようと思います。あと3年で20世紀が終わり、21世紀へと突入していきます。業界からのニーズもさらに多種多様になっていくでしょう。今後そのときに必要とされるスペシャリストになっていなければと思います。今までのような研究に対する消極的な姿勢では通用しないに違いありません。もっともっと積極的に自分自身に厳しい試練を与え自己を高めていこうと思います。

10周年を迎え今後ますます飛躍する鹿児島県工業技術センターの一員としてこれから一生懸命頑張っていこうと思います。“WOOD SPECIALIST”を目指して・・・

BE WOMANLY RESEARCH WORKER



素材開発部

研究員 肥 後 さより

平成4年の春、私は辞令交付を受けて工業技術センターの一員となりました。初めて工業技術センターに来たとき、なんて新しくて近代的で、立派で大きな施設なんだろうと驚きました。このような施設で仕事をするという僅かな期待を持つ反面、“私に勤まるのだろうか？”という不安な気持ち次第に強まっていったことを覚えています。

実際に工業技術センターは、県内中小企業の「技術的拠りどころ」として発足したわけで、センターの機能・役割、業務内容を知るにつれて、私のような大学を卒業したばかりの右も左もままならない若輩に勤まるはずがないと悩んだ時期もありました。でも、心優しい諸先輩方から多くの指導・助言を戴きながら試行錯誤しているうちに、あっという間に5年が経ち、一研究員としての実力が問われる頃になったことを焦燥の思いで実感しているところです。

最初の4年間は化学部に所属し、平成8年度には工業技術センターの組織改編に伴い、素材開発部に異動しました。担当業務は、一貫して金属化学分野で、主に、無機分析や腐食防食・表面処理に関する試験研究・評価等を行っています。また、表面処理技術の一つとして、物理蒸着法における薄膜形成技術を勉強してきたこともあって、平成9年度から国の補助による地域産学官共同研究事業「強誘電体インテリジェント材料の研究開発」に参加することになりました。地元企業に技術貢献できるような研究員になるために日々頑張っています。

さて、私事になりますが、当初は自分の他に女性研究員はいませんでした。そうになると、少なからず私が前例となって、今後の女性研究員採用の妨げになりはしないかと危惧したときがありましたが、その後一人後輩が増えてほっと安心しました。今後さらに、センターに女性研究員が増えて、女性としての感性で研究について意見交換が可能になれば、今までと違う何かを創り出せるのではないかと思います。

ただ、男女平等が謳われている世の中ですが、主婦業や子育てに費やす労力を考えると、男性と同じように“バリバリ”仕事をこなすには、まだ社会的にいろいろと残されている課題があるように思います。

何はともあれ、私は生まれ育ったこの鹿児島が大好きです。「すこやかな郷土、ゆとりの文化圏をめざして」、本県の特性を生かした豊かさとゆとりを実感できる生活先進県の実現に少しでも貢献できるよう努力していきたいと思っています。